万国津々浦々

アンデスとアマゾニアの挟間で

木村 秀雄
（きむら ひでお）
東京大学教授

高地は徒歩で、低地は船で

わたしは、南アメリカのアンデス高地とアマゾニア低地を調査地にしてきた。そのふたつの地域で調査の仕方には決定的な違いがある。調査地へ入る交通手段がまったく異なるのである。アンデス高地では、自動車でできるだけ近くまで行って、その後はひたすら歩くしかない。一方アマゾニアでは、航空機で空を飛んで行った後は、船を使って川を上ったり下ったりする。高地部でも低地部でも自動車で行けるところが多くなったが、アンデスでは徒歩、アマゾニアでは船、が基本である。

アンデス高地とアマゾニア低地は、自然環境も、社会文化のあり方も、先住民と国家の関係も、開発へのかかわりも大きく異なり、それぞれ独立した研究領域として扱われてきた。問題は中間地帯である。アンデス東斜面の下部にあたるアンデス＝アマゾニア中間地帯は、基本的に急な斜面を徒歩で移動するしかなく、接近しにくい地帯であった。今では、道路もかなり整備され、船外機付きのボートも使われるようになったとはいえ、移動が不便な地域であることに変わりはない。

一五世紀以前の先スペイン期から中間地帯は、高地部のアンデス文明地帯とも、またアマゾニアの先住民世界とも、関係があったのは間違いがないのだが、それがどのようなものであったのか、確かなことはわからない。アンデスの文明地帯とは、現在ではコカインの原料としても使われている儀礼用のコカの葉や、木材、砂金の供給を通じて関係があったことは確実だが、アマゾニアとの関係は皆目見当がつかない。

辺境の中間地帯へ

そこで二〇〇四年から、ペルーのアンデス＝アマゾン中間地帯をターゲットに調査を始めた。中央アンデスでは、中間地帯やアマゾニアの先住民は、先スペイン文明を育んだ高地部の先住民とは別のものとして扱われてきた。アンデスの先住民はインディオとよばれ、これは蔑称でもあったのだが、それ以外の先住民は「インディオですらない」まさに「野蛮人」という扱いを受けてきた。しかし、このわけ方は「文明地の住民」と「その他」という区分でしかなく、アマゾニアでいくつかの先住民と付き合った経験からすると、「その他」は極めて多様であるはずである。

かつて人びとの移動は、アマゾニアでは川の下流から上流へと、アンデス東斜面では上から下へと、おこなわれた。中間地帯はどちらの地域にとっても辺境であり、アラワク系の言語を話す先住民たちが暮らす、アンデスでもアマゾニアでもない、独自の領域を形成していた。アマゾニアの先住民と中間地帯の先住民を一把一絡げに扱うことはできない。

わたしはアンデスでもアマゾニアでも、国家や文明にとっての辺境地を研究してきた。アンデス＝アマゾニア中間地帯という辺境について、これまでとは違う視点で研究を続けていきたい。辺境から中央を照射するのが人類学のひとつの使命であるからである。

ペルー・クスコ県中東部、中間地帯上部、
標高1200メートル付近で、木材を運搬する途中
パンクのため立ち往生したトラック

ペルー・クスコ県北西部、中間地帯下部、
標高450メートル付近の
ウルバンバ川上流部を下る船外機付きボート